

国際文化学科の人材に求められる行動特性の考察： BEVI-JとCOILの試行を通して

Competencies required for students of Intercultural Studies: A Trial of BEVI-J and COIL

ウィルソン・エイミー、岩野雅子
WILSON Amy¹, IWANO Masako²

要 旨

新型コロナウイルスの蔓延のため、大学では海外との交流プログラムの見直しを求められ、コロナ禍での新しい国際理解・国際交流教育のあり方についての模索が続いている。今日のグローバル社会において世界市民として必要なコンピテンシーを育成するには、異文化理解や異なるものへの柔軟性、コミュニケーションスキルなどを育てる教育プログラムが必要である。

本稿では、海外派遣・受け入れによる授業活動の代替えとして急速に注目を集めるオンライン留学を視野に入れつつ、オンライン上での協働授業（COIL：Collaborative Online International Learning）に焦点を当て、本学がアメリカの2つの大学と行った2科目について報告する。そこで、主観的な学生アンケートに加え、客観的な評価方法としてBEVI-Jを用いて授業開始前と終了後の国際的な視点や態度の変化をみようと試みた。

学生のコメントではCOILに対して肯定的な意見が数多くみられ、BEVI-Jのいくつかの尺度においても数値が向上する傾向がみられたものの、より詳細な検証が必要である。継続的なBEVI-Jの実施により、実際に海外派遣プログラムに参加した学生や参加していない学生、COILやその他のオンライン留学に参加した学生などの比較を行っていきたい。

Summary

With the sudden outbreak of the Corona virus pandemic, universities around the world have been struggling with the cancellation of their international programs and are searching for new ways to promote their students' development of intercultural understanding, flexibility, and communication skills which are necessary for becoming active members of today's increasingly global society.

This paper looks at the implementation of two COIL (Coordinated Online International Learning) Programs between students at Yamaguchi Prefectural University and universities in the United States, and assesses their effectiveness based on the Japanese students' Pre- and Post-program comments as well as using the BEVI-j (Beliefs, Events and Values Inventory Survey in Japanese) to objectively measure the change in the students in regards to their intercultural competency.

Preliminary results from the student's comments show that students felt that both programs were effective, and results from the BEVI-j show a slight positive effect of both programs, however further investigation into the results of the BEVI-j is necessary and comparison of COIL programs with other short and long-term international program participants and non-participants will be conducted in further research.

キーワード：行動特性（コンピテンシー）、成長の測定、BEVI-J、COIL

Key Words: Competency, Evaluation of student's performance, BEVI-J, COIL

1 山口県立大学大学国際文化学部国際文化学科教授, Professor, Department of Intercultural Studies, Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

2 同上

1. はじめに

1994年に一学部一学科で創設された山口県立大学国際文化学部国際文化学科は、2007年に再編し一学部二学科となり、新しいカリキュラムに移行した。英語とともに中国語・韓国語にも力を入れ、2012年から5年間をかけて文部科学省の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成」事業に取り組み、言語力向上と海外留学促進を進めた。近年では2018年に学科内に2つのコース（英語コース、国際文化コース）を設け、両コースともに英語力向上に力を入れている。一方で、グローバル事業終了後は、英語だけでよいのかという疑問とともに、英語力が期待するほど伸びないという問題を抱えている。学生には言語に関する達成目標を示し、成長のプロセスを図式化して周知しているが、全体的に学習動機が高まらない現状にある。そこで、2020年度山口県立大学研究創作助成に応募し、国際文化学科の新しいディプロマポリシーに照らし、本学科が養成する言語教育職の方向の明示化と、今後求められる資質・能力を養成のためのスタンダードの作成を行うことを目指した。研究プロジェクトは6名の共同研究として実施し、本稿は其中で現状と課題の把握のために、BEVI-J（日本語版The Beliefs, Events, and Values Inventory）を用いた学生調査を行った結果についてまとめている。

アメリカの研究者グループが開発したBEVIはオンラインで実施する調査であり、心理学・心理統計学を基に設計され、心理的特性に関するものを含め、現在は180以上の質問からできており、自己全体を測定できるものである。Shealy (2016) は、「BEVIは教育、研究、からリーダーシップ・プログラムやメンタル・ヘルスに至るまで、様々な場面で利用することのできる、使いやすくまた柔軟性に富んだ、強力な分析ツールです。BEVIを活用することにより、学習・成長・変化のプロセスや成果を理解し、それらを促進させることができます」³とし、「1）包括的な背景情報、2）経験に関する質問、3）信念・価値・反応また世界観に関する包括的な評価、及び4）定性的な「経験に対する内省的な」質問項目という4つの相互補完的な測定手法が1つに統合されたもの」⁴であると説明している。批判的思考、自己の理解、他者の理解、世界の理解などという信念や価値に至る深遠な質問から成長度を測り、個人の変化も海外プログラムや教育プログラムの評価にも使用できるため、言語力や海外留学経験だけでは測れない、国際文化学科生の行動特性（コンピテンシー）や強みとは何かについて解明する手掛かりを得ることができると考えた。また、本学において海外プログラムに関する評価は参加者本人の主観的評価のみ（アンケート）であったが、BEVIの活用により客観的なプログラム評価が実施でき、学生の成長のレベルに適したプログラム内容の開発が可能になると考えた。海外文化接触初心者から、比較的長期間の海外経験のある学生まで異なるプログラムを開発できる。客観的な評価方法の活用は、日本の教育現場における海外交流プログラムの促進の道しるべになる。海外留学プログラムに参加した学生のコンピテンシー（行動特性）については、行動心理学的アプローチを用いた心理テストを行った研究（渡部他：2017、阿部他：2018）や、理工系の学生向けに評価ツールの開発を目指した織田（2019）の試みが注目される。その他、アメリカではIDI（Intercultural Development Inventory）をはじめとする評価ツールが利用されているが、日本語で使用できるものはまだ少ない現状にある。

一方、COIL（Collaborative Online International Learning）は、「大学の世界展開力強化事業」の一環として推進されている⁵。本学は関西大学の主宰するJPN-COIL協議会ネットワークの参加校となっている⁶。関西大学によると、COILとは「情報通信技術（ICT）ツールを用いて、海外の大学に属する学生達とバーチャルに連携しながら、様々な分野のプロジェクトに取り組む新しい教育実践の方法です。MOOCSのような一方向となりがちな学習形態とは異なり、国内にいながら海外大学の学生とコミュニケーションを図り、

3 BEVIのサイトより（日本語版） <https://jp.thebevi.com/about/>（2021年1月8日最終アクセス、以下URL閲覧最終日はいずれも同様）
Shealy, C. N. (Ed.). (2016). *Making Sense of Beliefs and Values: Theory, Research, and Practice* (New York: Springer Publishing) からの抜粋とされている。

4 同上

5 日本学術振興会 「大学の世界展開力強化事業」（Inter-University Exchange Project） https://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/sentei_jigyoo_h30.html

6 Institute for Innovative Global Education (IIGE機構)のサイトより。 <https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/JPN-COIL/> 2020年4月1日現在の会員リストは、 https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/JPN-COIL/images/pdf_list.pdf

共に学ぶことができます。』⁷と説明されている。近年、海外留学を通じ、言語力・異文化理解・異文化コミュニケーションを高めることが重要とされ、在学中の海外留学が奨励されてきた。しかし、2020年の新型コロナウイルスにより、海外留学機会は大きく失われ、今後の見通しもまだ立っていない現状にある。そのような中、オンライン上で海外の大学生との共同教育を行うCOILの実施や、オンライン留学などの工夫がなされ、COILが注目されているのである⁸。本学においても、2018年よりCOILを開始し3年目になる。実際の留学経験やオンライン上の留学や交流経験の有無が、学生の成長にどのような影響を与えるのか客観的に測定するために、心理分析テストである上記のBEVIの日本版（広島大学が日本語版を完成させたもので「BEVI-J」と称する）を使用して、本学科生のコンピテンシーをより明確にすることは、学年進行や科目履修、正課外活動、GPAやPROGテストとも連動しながら、国際文化学科生のアイデンティティと学生の能力向上を見る指標として有効性ではないかと考えた。

BEVI-Jについては、広島大学において行われている事例を参考に、後期開始時の10月に1年生から4年生に対して実施した。本来であれば4月の学年当初のオリエンテーションで実施し、前期終了時に2度目の実施、後期終了時に3度目の実施を行い、学生の成長の変化を図る予定であったが、新型コロナウイルスによりすべての授業がオンラインに変更されたため、前期中にBEVI研究会を行うことも、学生に対して実施することもできなかった。そこで8月に実施のための研修を受け、9月末の後期授業オリエンテーションで全学年の学生に対して初回の実施をした。また、これから学期末に2度目の実施を計画している。

本プロジェクトが受けた研究助成では、特に英語教育免許や日本語教員資格の取得を希望する学生の基本的な価値観や行動意識などについてBEVI-Jを用いて解明し、他の学生との違いを見る予定であるが、上記のような全学生への実施体制の遅れから、今回はBEVIが特に得意としている異文化理解度について、COIL授業に焦点を当ててみることに変更した。そのため、後期のCOIL授業の終了時に当該科目履修者にのみ2度目の実施をしている。2020年度はまだ試行の段階であり、一部の学生のみデータとなるが、BEVI-JとCOILの実施結果について報告する。

2. COILの実施結果について

(1) ノーザンイリノイ大学とのCOIL授業

COILを実施したのは、主として3年生対象の実践英語科目履修者「アカデミック英語Ⅳ」と、主として1年生対象の「国際交流Ⅰb」である。ここではまずCOILの授業運営について説明しておく。まず、国際文化学部国際文化学科3年生対象の実践英語科目「アカデミック英語Ⅳ」では、週2回計30回の授業のうち、4回分の授業をフルに使い、補足のためにもう4回分の一部を使った。また、この時間だけでは十分な交流活動ができないため、学生たちは授業時間外での自主学習時間で課題に取り組んでもらった。本学側では「アカデミック英語Ⅳ」担当者1名に、COIL授業時には2名の教員がつき、3名体制で実施した⁹。アメリカ側との時差があるため、ノーザンイリノイ大学の授業科目「Arts in Asia -Silk in Japan」¹⁰の開講時間（夕方18時頃）に合わせて、同じ時間帯に交流学习のできる本学側の一時限目の授業（朝9時ごろ）とマッチさせ、シンクロナイズド（同時開講）とした。ノーザンイリノイ大学は、本学が2008年度に文部科学省の国際化加速プログラムにおいて「英語で発信する地域遺産教育の開発～LOLを取り入れた『やまぐち地域遺産スタディーズ』の構築を目指して～」に取り組んだ際、海外先進事例として訪問した大学である。その後、日本学関連の科目を履修する教員・学生が、日本へのフィールドトリップで来日している。「Arts in Asia

7 関西大学プレスセンターのサイトより「世界中の学生と授業をシェアする新しい学びのカタチ『COIL（コイル）』◇「第3回KU-COILワークショップ・国際シンポジウム」を開催～ 全国に先駆けて導入した地球規模の遠隔教育の成果を発信 ～ 関西大学」
<https://www.u-presscenter.jp/>

8 「コロナ禍で注目 オンラインで海外とつなぐCOILとは」朝日新聞EduAのサイトより 2020年10月8日付記事 <https://www.asahi.com/edu/article/13789845>

9 「アカデミック英語」の授業科目担当者は西田光一、COIL授業の担当者はウィルソン・エイミー、COILの補助者は岩野雅子。

10 「Arts in Asia」の授業担当者はHelen NAGATA。

「Silk in Japan」のシラバスは約10ページに及ぶ詳細なもので、学生たちは多くの参考文献や資料、論文を読み、silkに関する歴史的・社会的・文化的・芸術的考察を行ったうえで、本学学生とauthentic（真正性）な学びを体験するためにCOILを通して4回の協働授業を受けることを目的とした。本学側の授業の目的は英語力向上にあるため、ノーザンイリノイ大学生の質問を受けながら、グループ別に英語での発表資料を作成し、5分間の英語での発表を行う学習経験を得ることを目的とした。アメリカ人学生の履修者は6名、日本人学生は19名であり、人数的にアンバランスな状況であったが、グループ分けはアメリカ人学生1名に対して日本人学生3-4名とし、今回はアメリカ人学生にリーダーを依頼した。

上記の授業実施前後のコメントは表1-1・1-2（授業前）ならびに表2-1・2-2（授業後）となっている。表1-1・1-2をみると、全体的にCOIL開始前は日本人学生が肯定的な感触を持って授業に臨んでいることがわかる。表2-1・2-2を見ると、実施後はほとんど肯定的なコメントをしているが、特にアメリカ人学生から好評を得ていることが印象的である。今後は、時間的に数週間では短かったこと、また、時差の関係で授業時間以外の連絡がつきにくかったこと、日本人学生側からのより積極的な授業参画が必要であると思われる。

表1-1 NIU and YPU COIL実施前のコメント（日本人学生）

| |
|--|
| 肯定的なコメント |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ It is highly anticipated that such exchanges will be possible in this situation where there is no exchange student. ・ We can't go study abroad due to coronavirus, so I'm glad to have the opportunity to take classes with foreign people. ・ I'm excited about talking with people from other cultures and COIL. ・ I am really excited this collaboration. but my English skill is poor, that's why I feel a little bit nervous. ・ 緊張していますが楽しみです。 ・ このご時世でオンライン上であっても海外の人とコミュニケーションができるのはとてもいい経験だと思う。 ・ きちんとコミュニケーションが取れるか不安ですが、それよりも楽しみが大きいです。積極的に話すことを意識して受けたいと思います。 ・ 海外の大学の生徒と一緒に何かをする機会はほとんどないので、楽しみではあるが自分の英語が通じるか不安である。また、絹や着物についての知識を深める良い機会なので、楽しみたい。 ・ 最近は留学生や外国人と関わる機会が減っていたので機会ができてうれしい反面どこか緊張しているところもあり少し不安です。けど楽しめるように頑張ります。 ・ 会話が出来るか不安ですが、出来る限りコミュニケーションがたたくさんできたらいいと思っています。 |
| 否定的なコメントを含む |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I am nervous because of communication. ・ 初めて海外の生徒と一緒に授業をうけることに緊張しています ・ 上手く話せるか不安ですが頑張ろうと思います |

表1-2 NIU and YPU COIL実施前のコメント（米国大学生）

| |
|--|
| 肯定的なコメント |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I hope to gain a better understanding of both kimono and Japanese culture after this collaboration. ・ I also hope to gain some new friendships! I look forward to meeting everyone, and am very excited to have this opportunity! ・ I recently made a friend in one of my studio classes last year who is from China and I absolutely love her. I understand much more about China now and just how other people think more. I think learning from people outside the US is important as it broadens our world view and makes us just a little more empathetic towards others and their way of life and thinking. ・ I hope to have a great experience. I may feel a little nervous but I hope to get past that with good communication habits. ・ I expect this to be fun and maybe difficult. I hope that everyone else has fun with it. ・ I am very excited for this collaboration. I think it will deepen my understanding and interest in Japanese culture |
| 否定的なコメントを含む |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I am a little nervous about the communications part, mostly because I am shy and also the language barrier. But hopefully that doesn't get in the way of making new friends. ・ I think I feel very anxious to be meeting new people and collaborating in a way that I never have before. I am excited to learn about a culture that I don't know about, and I think this experience will be very interesting. |

表2-1 NIU and YPU COIL実施後のコメント (日本人学生)

| |
|---|
| 肯定的なコメント |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I enjoyed talking with NIU students. ・ Our group topic was difficult, even for us, Japanese, but it was a good opportunities to learn about Noh. ・ This collaboration was so good for me because I could talk with foreign students in the era of COVID-19. ・ Due to the influence of Corona, there were no exchange students this year, and so it was a shame that there were no cultural or information exchanges. In this class, it was very good to know about each other's situation or university life that was unknown in newspapers or the Internet through this class. ・ I wanted to do this kind of experience. ・ It was a really nice opportunity to work with American students. ・ Thanks to this class, I was able to learn more about Ukiyo-e. At first, I was nervous about speaking in English, but American students were very kind. In the end, I was very happy to be able to exchange Instagram. I want to cherish the relationships with students whom I met in this class. ・ I enjoyed this class! Thank you for collaboration. I understand many foreign people wish to learn Japanese culture. I also would like to study about it. ・ I was busy to prepare a presentation, but I could learn about Japanese Kimono culture which I didn't know before. ・ I was very nervous at first, but my group members were so kind and we kept in touch regularly. I could solve my concerns. This project was very valuable for me. ・ I am relieved that our presentation was completed successfully, thanks to big supports from an NIU member of our group. ・ I was worried about this collaboration. However, An NIU student was very kind and she spoke slowly. Thanks for her, I could talk many things about the presentation. I enjoyed this collaboration very much. Also, I will study English more. ・ 4週間は本当にあっという間でした。 ・ 初めは上手く連絡が取れずに不安なことが多くありましたが、最終的には上手くまとまり、とても良かったです。 ・ 留学も行けなくなり、英語を勉強するモチベーションが上がっていませんでしたが、今回の授業を通して改めて話すこと、新しいことを学ぶことの楽しさを実感することができ、本当に良かったです。 |
| 否定的なコメントを含む |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I'm sorry that I was personally so busy during this class that I wasn't able to keep in touch with them. ・ It was interesting, but sometimes I was anxious. |

表2-2 NIU and YPU COIL実施後のコメント (米国大学生)

| |
|--|
| 肯定的なコメント |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I really enjoyed this COIL module! I was able to learn a lot more about my topic from my group members, and was also able to create new friendships. ・ I had a very good time with this COIL module. Although there were some difficulties, like communication difficulties, time difference, and the fact that most of these topics were new for the Japanese students, I think we all did a great job of overcoming them. For each 10 minute presentation, so much more work and communication happened behind the scenes, and my group was so awesome and eager to learn and help in any way. I think the most important thing this collaboration did though was give us a personal connection to the culture we are studying through making friends with each other. ・ I loved meeting and talking with the YPU students. They helped me with my paper and I learned a lot about Japan. ・ At first, I was somewhat anxious about how this would turn out. But when the weeks progressed everyone seemed to be more comfortable and I really started to enjoy communicating with my group. ・ I absolutely loved interacting with the students, I wish we were able to interact more with everyone, however ・ I understand that it is easier to have a set group you know who you are talking to as well. It would have been nice to get to know even more of the students! I have every expectation of staying in touch and I told my group members the first day that I would love to visit Japan so I really loved the core of what the COIL module was about which, I thought, was connecting the NIU and YPU students to collaborate on a project. Which, with what information we were given, was successful and enjoyable. |

(2) シンクレアコミュニティカレッジとのCOIL授業

「国際交流Ib」は全学教育科目で、主に1から2年生対象の授業である(学生数19名)。本来、欧米から来日する交換留学生と交流する授業になっていたが、新型コロナウイルスのために来日できなかつたため、欧

米オハイオ州にある短期大学シンクレアコミュニティカレッジの「Art History」科目（学生数22名程度）と8週間のCOILプロジェクトに取り組んだ。プロジェクトテーマは、「バン・ゴッホの日本画に受けた影響について」である。このCOIL授業が非シンクロナイズド（非同時開講）であったのは、時差と両授業の開講関係のため、同じ時間帯で開かれていなかったからである¹¹。第1週目の授業において、学生がフリップグリッド（Flipgrid）という動画ソフトの無料サイトでお互いの自己紹介を交換したのち、第2週目にお互いの美術の興味関心の動画の交換を行った。第3週目にはアイスブレイキングの後、両大学の科目担当教員からのオンデマンド型のオンライン講義を行った¹²。米国大学の教員は美術の基礎知識と美術プレゼン方法、本学教員は日本画の特徴と西洋で日本美術が流行した時代背景や理由について説明した。第5週目には、前回の講義に関するクイズを受けた上で、グループ分けを行い（日本人学生2-3名程度、欧米学生2-3名程度の9グループ）、ゴッホの絵を一つ課題として与えた後、学生同士でプレゼンテーション作成の準備に入った。3週間後にアメリカ人学生は自分の美術の授業で発表し、日本人学生は日本語で「国際交流Ib」の授業で発表した。発表についても同時に行うことができなかったが、発表資料そのものは共同作業の結果となっている。

受講前後の学生のコメントは表3ならびに表4の通りである。この科目ではアメリカ人学生のコメントはまだ届いていない。受講生の半数以上は栄養学科の1から2年生であり、普段外国人との交流がない学生が多く、交流前に戸惑いや英語に対する抵抗感（興味はあるが、話す自信がないなど）などの不安が大きかったことがわかるが、期待もしている様子を感じ取れる。また、受講後のコメントを見ると、コミュニケーションの難しさが書かれている。非シンクロナイズド（非同時実施）であり、学生同士がお互いの顔を見ながらプレゼンテーションを作成することができなかつたため、各グループのコミュニケーションに差が激しく、頻繁に取り合ったグループもあれば、ほとんど取り合わないグループもあった。学生の英語力の関係から、共同作成するプレゼンテーションの課題を絞り、限定的な範囲でもできるものを設定したが、今後は解決策を図りたいと考えている。しかしながら、小さなトラブルを少しずつ解決しながら、大半のグループは何とか発表資料を作成することができ、英語科目以外での非同期型のCOILプロジェクトとして、日頃海外留学にはいけない学部学科の学生たちに国際理解の経験を与えることができたと考えている。

表3 SCC and YPU COIL実施前のコメント（日本人学生のみ）

| |
|---|
| 肯定的なコメント |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I'm excited . ・ Wonderful, awesome, happy!! ・ I'm very exciting! ・ I'm so exciting about COIL, because I can communicate with other foreigners. ・ I look forward to this class. I want to communicate well. ・ This is the first time that I have ever experienced, so I'm looking forward to this collaboration. ・ I feel nervous but I am looking forward to this project more than my tension. ・ I'm not good at speak English, so I'm a little nervous. But, I'm looking forward to working with foreign students. ・ I'm not good at English, but I'm looking forward to making wonderful friends. ・ 英語が全くできないので、かなり不安ですが、なかなかない機会なので楽しみでもあります。自分なりに頑張りたいと思います。 |
| 否定的なコメントを含む |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I feel very nervous. ・ nervous and anxiety ・ I am a little worried. |

11 YPUの「国際交流Ib」は毎週火曜日の6限（18:05-19:35）で、シンクレアコミュニティカレッジの「Art History」は毎週火曜日の12:30-15:00（日本時間で水曜日の早朝である）。

12 「国際交流Ib」の科目担当者はウィルソン・エイミー、「Art History」の科目担当者はKay Koeningerである。

表4 SCC and YPU COIL実施後のコメント (日本人学生のみ)

| |
|---|
| 肯定的のみ |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I feel happy to work with group members. I learned many things from this class. ・ It was good to be able to communicate with foreign students and work together. ・ I was very anxious at first, but I am happy to have a very fulfilling time. ・ I was able to study deeply with overseas students. ・ This subject was very special for me. Originally, I felt little nervous to communicate with foreign students. After finishing, I enjoy this subject. ・ I enjoyed communicating with foreign students. It was easier than I expected to communicate. I was worried whether my messages would be transmitted, but I was able to finish the program safely. ・ I've had a precious experience. I felt the difference between culture and senses in taking communication. ・ I was confused at first, but it was more interesting. ・ はじめは不安が多かったが、楽しくできたので良かった。 ・ はじめは外国の人とコミュニケーションが上手くとれるのか不安だったけど、なんとか取れたのでよかったです。 ・ 発表もグループの人とうまく連絡できたのでよかったです。 ・ 海外の肩とコミュニケーションをとってみたいと思っていたけど、実際に海外に行ったり、日本で海外のかたとコミュニケーションをとれるようにするのは少し難しところが自分の中であったので、授業の中でそういう機会があるのはよかったです、" ・ はじめは外国の人とコミュニケーションが上手くとれるのか不安だったけど、なんとか取れたのでよかったです。 ・ 発表もグループの人とうまく連絡できたのでよかったです。 ・ 海外の人とコミュニケーションをとる機会がなかなかないのでとても良い経験になった |
| 否定的なコメントを含む |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ I found that we have to cooperate more with each other. ・ It is sometimes difficult for me to interact with my partners but I had a good time. ・ At the first time, I couldn't talk much and it was difficult to make a presentation. After communicating, I was able to cooperate and make a presentation. ・ I think I could have made friends if I could communicate with people in the same group a little more. ・ I wanted to talk and communicate more. I experienced this for the first time. So, I want to join like this project again. ・ I didn't communicate with SCC students very much, but I learned a real English by them. I enjoyed watching videos updated by SCC students ・ 日本とアメリカとの時差の関係でコミュニケーションをとるのが難しかった。 ・ 他の国と協力して一つのものを完成させることで達成感を味わえた。しかし、もっとスムーズに連絡が取れると思っていた。 ・ 直接会って話すことができないから、スムーズにコミュニケーションをとるのは少し手間取ったけど、お互い顔を見ることができたのはよかったですと思います。 |

2つのCOILプロジェクトを実施し、これからの改善点としては、COILプロジェクト内の受講マナーやコミュニケーションを円満にするマニュアルを作成して配布することが考えられる。例えば、連絡の返信をより早めにとること、先行して意見や提案をすること、要件だけではなくプラスαのやり取りで交流を円満に保つことである。また、頻繁に使用するコミュニケーションの表現事例集や専門用語の語彙集（日本語・英語）なども必要になる。さらに、教員の積極的な加入により、グループ内で抱えている問題解決を促す必要がある。

3. BEVI-Jの実施結果について

上記で述べた学生によるコメントは主観的なものであるため、これらのCOIL科目の履修者を対象にBEVI-Jを用いて異文化理解度の変化に関する客観的評価を行った。BEVI-Jは185項目の質問からなっているが、本稿では2つの科目の履修者の実施前（T1）と後（T2）について、17の尺度全体と、特に取り出した3つの尺度の変化を調べた。3つの尺度とは、「尺度15：社会文化的オープン性（Sociocultural Openness）」、「尺度16：生態との共鳴（Ecological Resonance）」、「尺度17：世界との共鳴（Global Resonance）」である。これらをもとに、それぞれのプログラムの特徴を踏まえての評価や改善点を考えた。なお、尺度16と17はGlobal Awarenessの尺度となっている。

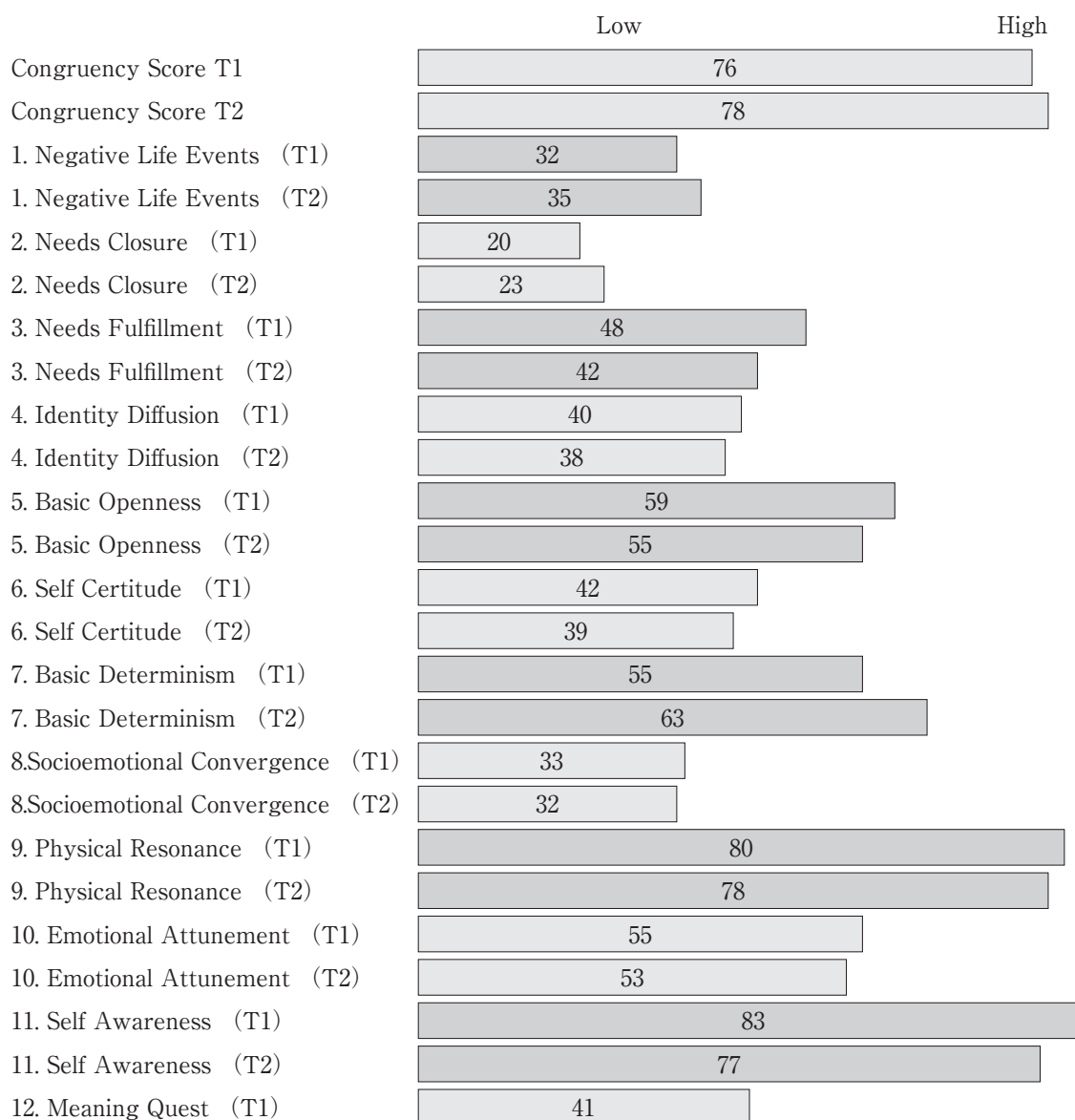
これら3つの尺度については、「BEVI報告書」には次のように説明されている¹³。

13 International Beliefs and Values Institute (IBAVI)、BEVI Group Report Silk & Japan. (www.ibavi.org)

- ・ 尺度15：社会文化的オープン性（Sociocultural Openness）
文化、経済、教育、環境、ジェンダー、国際関係、政治に関する様々な行動、政策また実行について進歩的、オープンである。
- ・ 尺度16：生態との共鳴（Ecological Resonance）
環境・サステナビリティ問題に深く傾倒している；地球、自然界の運命を懸念している。
- ・ 尺度17：世界との共鳴（Global Resonance）
様々な個人、集団、言語、文化について学習することまた出会うことに傾倒している；世界への関与を模索している）

まず、ノーザンイリノイ大学と行った国際文化学科専門科目「アドバンス英語Ⅳ」（主として3年生）のCOIL授業については図1ならびに表5の通りである。尺度15のSociocultural Opennessに関しては、すでに高いレベルにいた学生の分散と減少がみられたが、もともとのレベルが高くない学生には変化はなかった。尺度16のEcological Resonanceの高い学生には変化がみられなかったが、T1（事前に）レベルが高くなかった学生が大きく上昇し、また中レベルの学生もある程度上昇した。尺度17のGlobal Resonanceに関してはかなりばらつきが生じており、スコアの上昇はみられなかった。

図1 「アドバンス英語Ⅳ」 COIL授業の異文化理解度の事前事後変化（N=16）



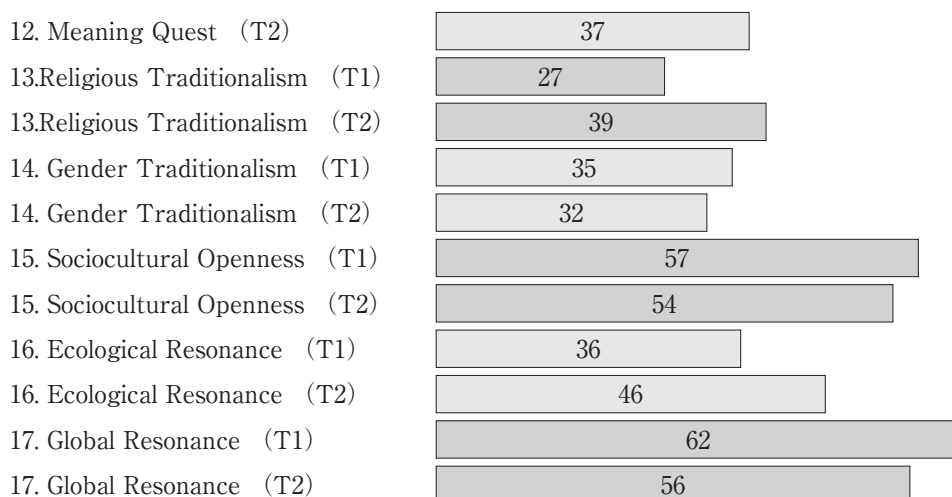
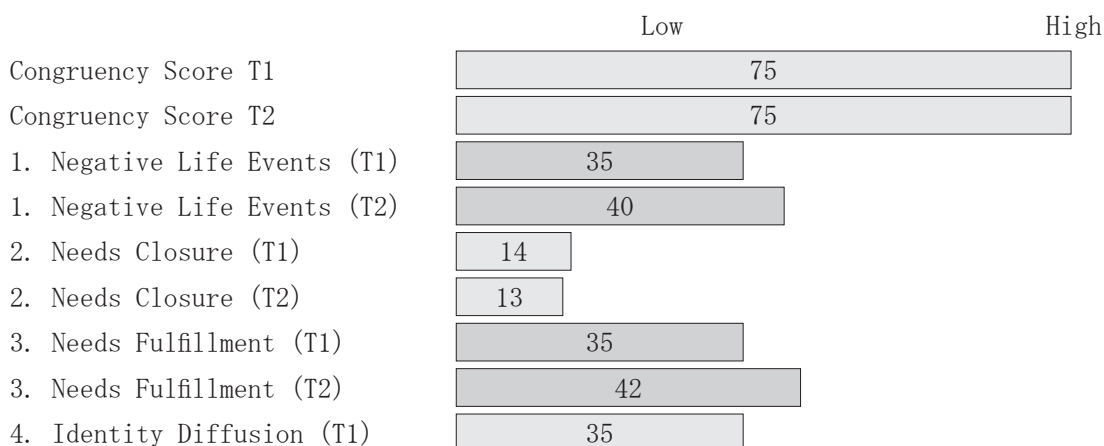


表5 「アドバンス英語Ⅳ」 COIL授業 T1/T2変化Decile Profile (N = 15)

| | | | | | | | | | | |
|---------------------------------|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 15. Sociocultural Openness (T1) | 0% | 6% | 19% | 6% | 19% | 12% | 6% | 0% | 25% | 6% |
| 15. Sociocultural Openness (T2) | 0% | 6% | 19% | 6% | 19% | 6% | 6% | 19% | 19% | 0% |
| 16. Ecological Resonance (T1) | 0% | 19% | 25% | 12% | 25% | 0% | 6% | 6% | 6% | 0% |
| 16. Ecological Resonance (T2) | 0% | 6% | 6% | 19% | 38% | 0% | 25% | 6% | 0% | 0% |
| 17. Global Resonance (T1) | 6% | 6% | 6% | 0% | 0% | 19% | 19% | 12% | 25% | 6% |
| 17. Global Resonance (T2) | 6% | 0% | 25% | 12% | 0% | 0% | 25% | 6% | 12% | 12% |
| Deciles: | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |

次にシンクレアコミュニティカレッジと行った基礎教養科目「国際交流Ⅰb」（主として1-2年生、栄養学科生の履修が多かった）の異文化理解度の変化を図2ならびに表6に示した。図2で示したとおり、尺度15のSociocultural Opennessと尺度16のEcological Resonanceに変化が見られたのに対して、尺度17のGlobal Resonanceには若干の減少がみられた。これを十分位数プロフィール（表6）でみると、Sociocultural OpennessとGlobal Resonanceの二つの尺度については、プログラム後に二極化したことが目立つ。これはコミュニケーションがよく円満に作業進めたグループと、そうでないグループによる差が結果につながった可能性が高く、今後も詳しく調べる必要がある。Ecological Resonanceに関しては、全体的により高いレベルにシフトしていることは、欧米大学生との共同作業の中で、芸術環境に関する新たな視点を得たことによる変化であったと考える。

図2 「国際交流Ⅰb」のCOIL授業の異文化理解度の事前事後変化 (N=15)



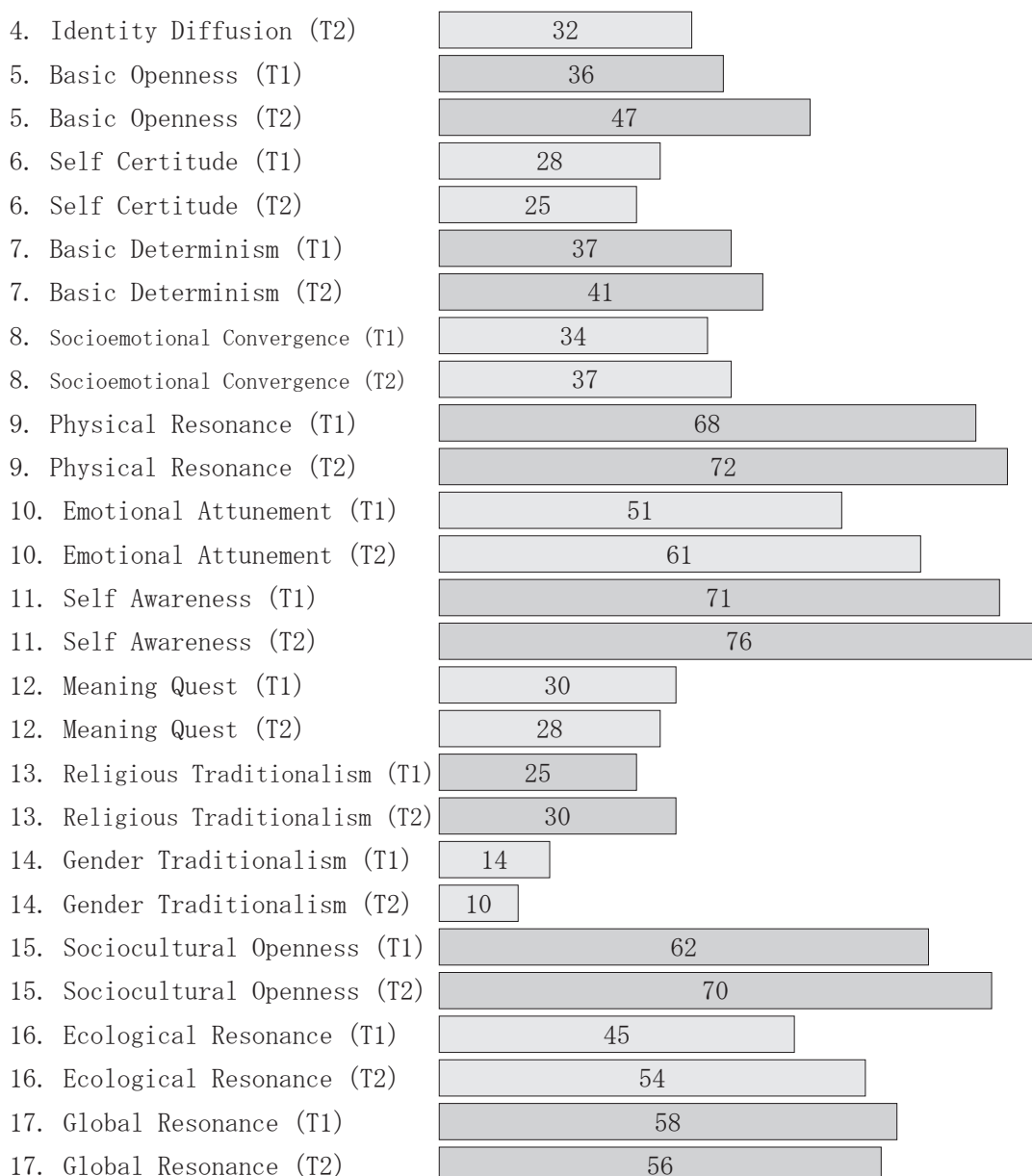


表6 「国際交流 I b」 COIL授業 T1/T2変化Decile Profile (N = 15)

| | | | | | | | | | | |
|---------------------------------|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 15. Sociocultural Openness (T1) | 0% | 13% | 13% | 7% | 13% | 7% | 7% | 0% | 27% | 13% |
| 15. Sociocultural Openness (T2) | 7% | 0% | 20% | 7% | 13% | 0% | 0% | 13% | 0% | 40% |
| 16. Ecological Resonance (T1) | 7% | 0% | 20% | 13% | 27% | 7% | 7% | 13% | 0% | 7% |
| 16. Ecological Resonance (T2) | 0% | 7% | 13% | 13% | 13% | 20% | 13% | 0% | 7% | 13% |
| 17. Global Resonance (T1) | 7% | 13% | 13% | 7% | 0% | 13% | 0% | 7% | 27% | 13% |
| 17. Global Resonance (T2) | 7% | 0% | 40% | 0% | 0% | 0% | 13% | 0% | 33% | 7% |
| Deciles: | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |

学生のコメントで見られたCOIL授業への比較的肯定的な意見が、17の尺度のより詳しい分析を通して、どのような知識・スキル・態度の変化を生じており、どのような教育効果があるのかについて、さらに分析を重ねていく必要がある。with/afterコロナの時代の海外との協働学習はオンライン上でますます加速することが予想されており、今回、国際文化学科生のみならず、基礎教養科目において他学科の学生からも肯定的な意見や期待がよせられたことは、COIL授業の可能性を示していると思われる。今回は日本人学生のみでのBEVI-Jスコアを分析したが、今後はアメリカ大学生のスコアを合わせて分析し、相互的な評価とプログ

ラム改善を試みたい。

Wandschneider, E. et al (2015) は、BEVI-Jについていくつかの尺度を取り出して分析するのではなく、17の尺度全体としてみていく必要があると述べている。グローバル、異文化理解、国際交流などといった言葉は、その言葉に関連する尺度のみに着目しがちであるが、人間全体としての成長の変化を見ると、一部だけを取り出して議論するのは意味が薄い。この点で、21世紀のグローバルな市民社会を生きる人材育成において、「グローバル・コンピテンシー（国際的な行動特性）」が意味するもの自体を問い直す必要もあることを示唆している。BEVI-Jの使用、分析、評価、学生へのフィードバック、科目やプログラム改善については、さらに研修を重ねていきたいと考えている。特に、Wandschneiderのいう7Ds（duration, difference, depth, determine, design, deliver, debrief）に着目し¹⁴、個人やグループメンバーの背景に配慮しつつ、教育プログラムにかかる時間、要素としての素材や参加者の多様性、テーマの深さ、目的やゴール、教授方法、授業デザインなどが教育効果を大きく変えることをふまえて考察を行いたい。

4. おわりに

2020年度はBEVI-Jの試行を行うための学内研究助成を受け、9月末に国際文化学科生全員に実施したのち、学年末での実施を控えている。本稿ではCOIL授業科目においてのみBEVI-Jのデータの一部を用いた授業前後の比較を行ったが、今後は学年末の実施結果をもとに、さらに基礎的なグローバル・コンピテンシーや自己開示（self-awareness）などの変化への影響を検討する必要がある。国際文化学科においては、語学力向上と海外留学等を通じた国際的な行動力育成を目標としており、特に語学力のレベルと留学体験の違いによる意識や態度の違いについて比較検証する予定としている。また、英語教員や日本語教師を目指す学生については、言語力や海外留学だけでない特性について明らかにするために、今回初めて実施したBEVI-Jを継続して実施し、学生の成長度を測定する必要がある。

COILとBEVIによる海外留学やオンラインによる海外との協働授業に関する客観的評価については、2019年度に関西大学において「COIL-BEVIセミナー」が開催されている¹⁵。これをみると、海外留学プログラム（派遣、受入）の実施前後のアンケート調査（主観的評価）に合わせて、客観的評価を用いて学習成果を可視化していくことが重要であるということがわかる。さらに、分析ツールとしてのBEVI-Jの効果についても、海外留学プログラムのみならず、オンライン上の海外協働授業COILにおいても有効であることがわかる。その際参考にしたいのは、短期海外研修の教育成果についてBEVI-Jを用いて検証を行った永井の研究（2018）、BEVI-JとIDI（Intercultural Development Inventory）との比較を行った永井の研究（2019）である。これらを参考にしつつ、COILの評価、ならびに、教職課程ではなく国際文化学部で育成する英語教員や日本語教員の特性についても明らかにすることを目指したい。

引用文献

- 阿部 仁、新見有紀子、星 洋（2018）「グローバル環境で育む4つの力—留学前後における派遣学生のコンピテンシー変化について」『一橋大学国際教育センター紀要』第9号 pp.5-18
 Institute for Innovative Global Education（IIGE機構）のサイトより。https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/JPN-COIL/ 2020年4月1日現在の会員リストは、
 https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/JPN-COIL/images/pdf_list.pdf
 International Beliefs and Values Institute（IBAVI）、「BEVI_Group Report Silk & Japan」
 https://www.ibavi.org）（2021年1月10日最終アクセス、レポート作成）
 上野 創「コロナ禍で注目 オンラインで海外とつなぐCOILとは」朝日新聞EduAのサイトより

14 Wandschneider, E. et al (2015) 'The Forum BEVI Project: Applications and Implications for International, Multicultural, and Transformative Learning'. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, p.217

15 関西大学のウェブサイトより 2019年10月8日開催 https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/webinars/detail.php?seq=39

- 2020年10月8日付記事 <https://www.asahi.com/edua/article/13789845>
- 織田佐由子（2019）「理工系人材のグローバル・コンピテンシーの 開発と評価」芝浦工業大学博士論文
<https://core.ac.uk/download/pdf/235184122.pdf>（2021年1月11日最終アクセス）
- 関西大学プレスセンター「世界中の学生と授業をシェアする新しい学びのカタチ『COIL（コイル）』
「第3回KU-COILワークショップ・国際シンポジウム」を開催～ 全国に先駆けて導入した地球規模の
遠隔教育の成果を発信 ～ 関西大学」（2017年11月27日） <https://www.u-presscenter.jp/>
- 永井 敦（2018）「BEVI によるショート・ビジット型留学プログラムの効果分析 — 「グローバル人材」
は育成できるのか？—」『広島大学留学生教育』22号 pp.38-52
- 永井 敦（2019）「BEVI と IDI の比較 — その基本的特徴と妥当性に関するエビデンス —」『広島大学森
戸国際高等教育学院紀要』1号 pp.7-14
- 日本学術振興会 「大学の世界展開力強化事業」（Inter-University Exchange Project）
https://www.jsps.go.jp/j-tenkairyoku/sentei_jigyo_h30.html（2021年1月8日最終アクセス）
- Shealy, C. N. (Ed.) . (2016) . Making Sense of Beliefs and Values: Theory, Research, and
Practice (New York: Springer Publishing) 。BEVIのサイトより（日本語版）
<https://jp.thebevi.com/about/>（2021年1月8日最終アクセス）
- Wandschneider, E. et al (2015) 'The Forum BEVI Project: Applications and Implications for International,
Multicultural, and Transformative Learning'. *Frontiers: The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*,
pp.150-228.
- 渡部由紀、阿部 仁、新見有紀子、星 洋、二子石 優（2017）「グローバル環境で育む4つの力—留学前
段階における派遣学生の行動特性測定結果」『一橋大学国際教育センター紀要』第8号 pp.143-156

謝 辞

この研究は、令和2年度山口県立大学研究創作活動助成（Ⅱ教育改革型、課題名：国際文化学科の人材育成の利点を最大限に活かした言語教育職養成と教育改善に関する研究）により研究が遂行されたものです。この場を借りて御礼申し上げます。また、BEVI-Jに関する勉強会の講師でお越しいただいた広島大学の西谷元教授に厚く御礼申し上げます。